地域政策と『遠野物語』

吉村　馨（よしむら　かおる）

地域政策と農政

地域政策という言葉を聞いたことがあると思います。共済・協同組合は、地域に根差した活動を基本としているので、国や地方公共団体が展開する地域政策と深いかかわりを持っています。

一方、農政の中でも地域政策は一定の位置付けを与えられています。2020年に策定された直近の食料・農業・農村基本計画では、「産業政策と地域政策を車の両輪として推進」と記述されています。同じ文章が2015年の食料・農業・農村基本計画にもあります。農業の成長産業化という旗印の下、産業政策に偏りすぎているという批判があり、いやいやバランスよく進めますよという、良く言えば意気込み、悪く言えば言い訳を表したものです。

地域政策という言葉が農政において公式に登場したのは、2005年の食料・農業・農村基本計画でした。ここでは「産業政策と地域政策の両者の関係を整理した上で分かりやすい政策体系を構築する」という少し歯切れの悪い記述でした。しかし、その計画に基づいて進められた政策は、担い手を対象とする品目横断的直接支払い（産業政策）と農地・水保全支払い（地域政策）の創設という、すっきりとしたものでした。

地域政策の目指すもの

私も過去40年いろいろな形で地域政策にかかわってきました。その間、地域政策が目指す姿は変わってきています。

昭和の最後の10年くらいは「均衡ある国土の発展」、その後10年くらいは「地域の独自性の発揮」、そしてその後は「都市と農村の共生・対流」というように強調する点が変遷しています。

現場主義

そのような変化の中で、一貫して変わらない要素に「現場に学ぶ」という姿勢があります。地域政策を進めていく上で、現場のさまざまな事例を調査し、とりまとめる作業の重要性が常に強調されてきました。

これは国の段階だけではありません。私が鹿児島県下の町役場に勤務していた頃、鹿児島県では農村振興運動という取り組みを進めており、私自身むらづくりの先進地視察に参加したこともありましたし、他の市町村の職員や議員を迎え、案内したこともありました。

●○巻頭言

現場主義の落とし穴

現場のさまざまな取り組みを調べていくと、一つ一つ工夫があったり、ユニークだったり、中心となる人のキャラクターが際立っていたりで、面白くて、ついつい事例集めと優良事例の紹介にのめり込んでしまうきらいがあります。

その結果、国の段階では、他の地域で活用可能な地域政策のソリューションまで到達しないことがあります。市町村段階では、先進地視察で訪れた地域の活気や話をしてくれた人の熱量に圧倒されて帰ってきて、自分の市町村の取り組みに反映しようとなると、その糸口が見つからないということがあります。

遠野物語

そんな時に自戒の念を込めて読み返すのが柳田國男の『遠野物語』です。柳田は、私にとって農林水産省の大先輩で、農村調査を丹念に行った地域政策の大先達でもあります。

遠野物語では、柳田が遠野在住の佐々木鏡石（きょうせき）という人から聞き取った、「こんな不思議な体験をした人がいる」「こんなおかしな出来事があった」ということを延々と記述しています。柳田自身「こんな本を出版し自己の狭隘（きょうあい）なる趣味をもって他人に強いんとするは無作法の仕業」としながらも、「この書は現実の事実なり。単にこれのみをもってするも立派なる存在理由ありと信ずる」と書いています。

ただ、柳田が偉いのは事実の列挙に終わらせないで、これを民俗学という学問にしたことです。

ＪＡ共済総合研究所の役割

私どもの研究所の重要なミッションの一つに、農村の現場を調査し、地域活性化や介護・福祉・子育て等の優れた取り組みをわかりやすく説明して、広く知ってもらうというものがあります。そのこと自体重要ですが、そこから先、学問にするのか、ソリューションを提供するのか、分かれ道になります。それぞれ固有の専門性が求められ、難しい課題ですが、両方の道をバランスをとって進んでいけたらと考えています。

（一般社団法人ＪＡ共済総合研究所　理事長）